教皇様の声

神の愛の秘義

愛する兄弟のみなさん、「汚れなき無原罪のおんやどり」の聖母に捧げられた、ルハンの美しいバジリカ聖堂の前に、私たちは今日、主の祭壇で祈るために集まりました。

キリストの御母であり、私たち一人ひとりにとっても母であられる聖マリアにお願いして、平和を渇望し苦しんでいる私たちの、心の奥底にある悩みを、御子に捧げていただきたいと思います。

今日私たちは、勇気と希望、そして兄弟愛を聖母に求めて祈ります。聖母は一六三〇年以来、ご保護を求めてここを訪れる人々すべてを、母として、おおらかに喜び迎えてくださっています。

祝別されたこの聖母像の前で、教皇ウルバノ八世、クレメント十一世、レオ十三世、ピオ十一世、ピオ十二世と、歴代の教皇様が聖母への信仰を示されました。ペトロの後継者として、私も、謹んでみなさんと共に聖母の御前にひざまづき、子としての愛を深めるためにやってきたのです。

本日の典礼は、すべての人の眼前にカルワリオでのキリストの十字架をみせてくれます。しかし、「イエズスの十字架のかたわらには、その母と母の姉妹と、クロパの妻マリアと、マグダラのマリアが立っていた」(ヨハネ19・25)だけでした。

カルワリオでのキリストの十字架

苦難の時期の巡礼者としてここに来た私は、みなさんと心を合わせて、いま一度、よく知られている主のみ言葉を読み返してみたいのです。主のみことばは、地球上さまざまな場所で同じ意味をもってひびきます。しかし、同じではありません。それは時が移っても変わりませんが、それぞれに異なった意味をあらわしているのです。

苦悩と愛の座である十字架の高みから、イエズスは御母と弟子にお話しになります。御母には、「婦人よ、これがあなたの子だ」とおおせられ、また弟子には、「これがあなたの母だ」(ヨハネ19・26～27)とおおせになりました。

アルゼンチンのこの聖地ルハンでの典礼は、十字架のご功徳によって、人間が神のみ前にまで高められること、すなわち、神の御子、聖マリアの御子イエズス・キリストにこそ、人間の永遠の祖国があること、について告げています。人間のこの目的地は、カルワリオの十字架においてしめされているのです。

エフェゾ人への手紙の著者は、永遠に神のみ前に上げられる人間の前表を、キリストの十字架によって表わしています。

「主イエズス・キリストの父である神をたたえよう。神はキリストにおいて天上から、私たちを霊のすべての祝福で満たされた。」(エフェゾ1・3)

ここルハンであげられる典礼の中心部分で、このキリストを礼拝します。不名誉な死に定められたキリストを拝むのです。

このキリストのうちに、私たち自身を見ることができます。神の御力によってのみ、高みにまで上げられ得ることを悟りましょう。これこそ「霊の祝福」なのです。

神の恩寵によって、このように人間が神の方へと高められるのは、十字架上のキリストのご功徳によるほかありません。御父の愛の永遠のご計画によると、あがないの秘義においては、一つのことが他のことによって成就されるのであって、それ以外の方法では成し遂げられません。つまり、十字架を通してのみ、恩寵による高めが実現するのです。

従って、御父の愛と御子の捧げものは永遠であるゆえ、あがないの秘義は、永遠に、絶え間なく行なわれます。

それはまた、時間の中においても実現されています。事実、カルワリオの十字架は、人類の歴史における具体的な時を意味しているのです。

神の養子

「神は世の創造以前から、愛によってご自分の前に聖である者、汚れない者とするために、」(エフェゾ1・4)キリストにおいて、私たちをお選びになりました。(…)

神は私たちを、イエズス・キリストを通して、「ご自分の養子にすること」(エフェゾ1・5)を、あらかじめ定めておいでした。御父は、「愛子」を通して、ご自分の養子としての尊厳を私たちに与えてくださいました。

以上が、神のみ旨による永久に変わることのない決定であって、その中にこそ、無償でさずけられた「恩寵の光栄のほまれ」(エフェゾ1・6)があらわれているのです。

そして、十字架は、私たちにこのことを余すところなく語っています。(…)

それゆえ、兄弟姉妹のみなさんとご一緒に、もう一度神の永遠の愛のうちに、人間が神のみ前にまで上げられるという深遠な真理、すなわち、キリストの十字架によって証明された真理を読み返してみましょう。

「まず、キリストに希望をおいた私たちは、神の光栄のほまれとなるために生きるよう、予定され、約束されていた。」(エフェゾ1・11～12参照)

私たちは、信仰の目をもってキリストの十

> **神の恩寵によって、人間が神の方へと高められるのは、十字架上のキリストのご功徳によるほかありません。御父の愛と御子の捧げものは永遠であるゆえ、あがないの秘義は、永遠に、絶え間なく行なわれます。**

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済
©1983 精道教育促進協会 ☎(芦屋)三一・三四五二 芦屋市船戸町12—6

字架に心を向け、神の永遠の秘義を悟らなければなりません。これについてはエフェゾ人への手紙の著者が語っています。たったいま耳にした書簡によれば、「み旨のままにすべてを導かれるお方のあらかじめ定められた計画」（エフェゾ1・11）とあります。

神のみ旨は、キリストの十字架を通して人間を神のみ前にまであげること、神の子の尊厳にまで高めることなのです。

じっと十字架を見つめると、そこに人間の悲しみ、キリストの苦悶を見ることができます。

神のみ言葉と信仰の光があれば、キリストのご受難のうちに、神のみ前にまで高められ、この上ない尊厳を得た人間の姿を発見することができるでしょう。

聖母は私たちの母でもあられる

キリストの十字架を見つめる時、十字架の上から、マリアにおっしゃったイエズスのみ言葉は、私たちにとって一層深い意味をもってきます。「婦人よ、これがあなたの子だ」（ヨハネ19・26）、そして、ヨハネに向かって、「これがあなたの母だ。」（ヨハネ19・27）

これらのみ言葉は、救い主の遺言（ゆいごん）とも言えます。主は、十字架によって神の永遠のご計画を完成し、十字架によって神の養子という恵みを取り戻してくださいました。と同時に、ご自分の犠牲を完成される瞬間に、ご自分の御母に、私たちを子供としてゆだねてくださったのです。私たちは、「これがあなたの母だ」というみ言葉が、十字架のもとにとどまっていた弟子のためだけではなく、すべての人間を含んでいる、と解釈します。

聖地ルハンの伝統は、これらのみことばを、確かに典礼の中心にしてきました。それは、次のように語りかけているようです。この地上でも、死後においても、人類のゆく末をはるかに見通すこの十字架の秘義をよく心に留めておきなさい。神が愛の心から御子にお与えになった聖母マリアは私たちの母でもあるわけですから、母にふさわしい子になりなさい。

とくに、苦難の時期や、より大きな責任をになうべき環境にいるとき、このように考えてほしいのです。（…）

奉献

キリストにおいて、すべての人が神の方へと高められるというこの秘義を黙想しながら、みなさんと共に、聖マリアのおことばを繰り返します。全能の御方が、私たちに偉大なことをなさったからですと。（ルカ1・49参照）

「そのみ名は清く、
そのあわれみは、代々敬いおそれる人々の
上にくだります。
また、その御腕の力をあらわし、
おごる思いの人々を散らし、（…）
主は御慈悲を忘れず、
しもべイスラエルを助けられました。
私たちの先祖に約束されたように、
アブラハムとその子孫に、いつまでも」
（ルカ1・49～55）（…）

聖母マリアよ、あなたの子供たちに、耳を傾けてください。彼らは、見よ、あなたの子を！あなたの母を！と、十字架上から言われたお言葉を、自分たちに向けて直接言われたものとして、喜んで受け入れています。

あがないのみ業のなかで、キリストご自身が、私たち全員を一人ひとり、あなたに託されました。

私たちは今日、ここルハンの聖地へ、あなたのご保護のもとにおかれているという安らいだ心でやってまいりました。そして、ローマ司教の私も、御身にすべての人をおささげするために、やってきたのです。（…）

すべての家族と、全国民をおゆだねします。今日の典礼ではっきりと示されたように、すべての人が、キリストにおいて神の方へと高められる恵みにあずかれますように。神の御子において、永遠なる御父の養子として、信仰、希望、愛に満ちた生活を送ることができますように。（…）

あなたの子供たちのねがいをお聞きください。彼らに、救い主イエズス・キリストを、そして、道、真理、生命、希望をお示しください。アーメン。　（一九八二・六・十一）

アンジェルス・メッセージ

私たちが召されている希望とは？

1主イエズス・キリストの御父が、私たちの心を照らし、私たちにどのような希望に召されているかを理解させてくださいますように。

きょうは、エフェゾ人への手紙からの引用をもとにして祈りましょう。この祈りを、お告げの祈りと関連づけることにします。

――主のみ使いの告げありければ、マリアは聖霊によりて懐胎（かいたい）したまえり。

――しかしてみ言葉は人となりたまい、われらのうちに住みたまえり。

まさにこの瞬間に、永遠の御父は、ご自身の光で私たちの心を照らしてくださったのです。このときから、「どれほどの希望に召されているか（エフェゾ1・18）を知るのです。

今日のお告げの祈りでは、この人間としての、あるいはキリスト信者としての召しだしについて黙想しましょう。

2私たちは、イエズス・キリストにおいて永遠から召されています。父なる神は「世の創造以前から、キリストにおいて私たちを選び、」（エフェゾ1・4）「み旨のままに、イエズス・キリストによって私たちをご自分の養子にしようと予定された。」（エフェゾ1・5）

「私たちはイエズスにおいて、その御血によってあがないを受け、豊かな恩寵に従って罪のゆるしを得た。」（エフェゾ1・7）

以上は、エフェゾ人への手紙からの引用です。神がどのような希望に私たちを呼んでおられるか、永遠なる御父が私たち一人ひとりを、すでにこの世で、また永遠という面からみても、どういうところに召し出されたか、これらが引用した手紙の内容です。

人間が、イエズス・キリストにおいて超自然的に高められ、神の養子としての尊厳を受けたことが示されています。これは、当然私たちが感謝すべきことです。

3親愛なる兄弟姉妹のみなさん、これらの問題については、いくら考えても、もうこれで充分だということはありえません。信仰と希望と愛の心で、黙想すればするほどよいのです。

今、お告げの祈りを唱えながら、すべての人が、たがいにイエズス・キリストにおいて分かつこの召し出しに気づき、受け入れるよう祈りましょう。また、すでにキリストを知っている信者すべてが、どんな希望に召されているかをもっと完全に理解するよう祈りましょう。天の御父が、ご自身の光ですべての人の心を照らしてくださいますように。

4キリストの王国で特別な奉仕をするために召し出される人々、つまり、司祭職、修道生活に召される人々が、神のよびかけ（召し出し）をよろこんで受け入れ、受け入れた道に従うよう祈りましょう。

永遠の御父が彼らの心を、特別な光で照らしてくださいますように。（…）

説教・講話・書簡等の抄訳

司祭の養成について

（…）司祭養成は昔から聖座の一大関心事でありましたが、最近はそれが心配の種になってきました。（…）昨月五月、召命に関する国際会議が開催されました。そして、そのとき、召命の減少が教会にとって大きな問題となっていることを再確認いたしました。司祭職への召命があるということは、教会が生き生きと活動していることを示す証拠であり、印であると言えます。それはまた、教会が使命を果たし発展を続けるための欠かすことのできない条件でもあります。こう申しあげながら考えているのは、言うまでもなく、神学校についてであります。召命を歓迎し、育成することこそ、神学校の目的であるからです。（…）

みなさんもよくご存知の通り、教会は、神学校が直面する問題を隠すつもりはありませんし、問題解決の方法を考えずにおく意図もありません。第二バチカン公会議においても、この問題をよく考え、研究をすすめるよう要望するのみならず、司祭候補者の霊的、知的面、さらに規律について、基準や指針まで提供しています。

霊的生活

まず第一に来るのは候補者の霊的な面での準備です。神学校としては、神学生が主を知り、主を体験する（主と交わる）よう努力しなければなりません。人々の牧者にふさわしく、人格と活動の面でも真の「キリストのしもべ、神の奥義の管理者」（コリント前4・1参照）を育成しなければならないのです。

司祭候補者の霊的準備として特に考慮すべき事柄としては、カトリック教育聖省の回状に注目して欲しいと思います。要約すると、次のようになるでしょう。

(1) 神のみことばであり、私たちの兄弟にして友、救い主キリストを受け入れ、深く愛する司祭を養成すること。

(2) ご復活の秘義が私たちに対する御子の愛のあらわれであることを理解し、教会のため「極みまで」自己をささげることのできる司祭を養成すること。

(3) キリストとの交わりが本物であれば、修徳の努力、つまり自己放棄と犠牲を実行すべきであるという事実を恐れずに認める司祭の養成に力を尽くすこと。

(4) 神学校は、イエズスの母にして私たちの母である聖母マリアへの愛を学ぶ学校にならなければならないこと。

霊的指導者の役目は真の司祭養成ですから、その務めは何ものにも替えがたいほど大切なのです。指導者の仕事が神学生教育の根本であると言われるのは、霊的指導が決定的瞬間となって、神学生の心に、一生の間最高の師として仰ぐキリスト像をかたちづくるからなのです。従って、霊的指導と神学生との関係は、明るく解放的で継続的なもの、つまり真剣味をもっていなければなりません。単に話を聞くだけとか、考えや意見を交換するだけでは充分ではありません。グループの話し合いになったり、友人同志の親しい語り合いと同じように扱うわけにもいかないのです。霊的指導とは生き生きとした深い信仰のあらわれですから、訓練を受け、司教に任命された司祭の責任のもとに行なわれるべきだというわけです。

このような霊的指導の目的を達しようと思えば、とくに教会論に重きをおきつつ、聖務と神学の光を受けなければなりません。また、若い人たちを取りまく諸条件、心理的、社会的反応、現代社会における文化の変化などについてもよく考える必要があります。

さらに、神学生が祈りと内的生活という健全な習慣を身につけるよう恐れることなく導いてやらねばなりません。天の王国のために鋭意挺身する決心を最後まで維持しようとする者にとって、祈りと内的生活が不可欠であることは、真の司祭的魂の持ち主が幾世紀にもわたり体験し、伝統的に霊性の諸学派が吟味し勧めてきた通りです。

規律は必要

ついで、規律面での訓練が大切です。神学生の人格形成はもとより、自然の傾向を抑えて義務に従う習慣をつけるために、また共同生活のきまりを尊重するという点からも、規律はどうしても必要な条件です。規律が神学校教育全体の一要素であることにも注目しなければなりません。規律は自制心を養い、確固として円満な人格を形成し、教会の秩序正しく実り豊かな活動に役立つその他の心がまえを養成するためにも必要なものなのです。（『司祭の養成に関する教令』11参照）（…）

（信頼感を育む必要について語ったあと）理由を説明した上での話ですが、神学生に、自己放棄と犠牲をよろこんで受け入れるよう要求することも大切です。犠牲と自己放棄をいとわぬ心構えがあってはじめて、厳格簡素な生活態度を維持し、機敏な働きによる豊かな実りを与えることができるからです。

知的成長

最後に、知的な面での準備について考えなければなりません。神学生にとって勉学とは、自己の成長進歩に効果ある手段であるだけでなく、敬虔な生活と共に、日々の大切な務め、専門職でもあるのです。哲学や神学課程にある学生にとって、勉学は特別の意味をもつはずです。信仰生活を豊かにする助けであり、将来の聖務にとっても絶対に必要な条件であるからです。哲学や文学の動向を知り、歴史、文化、社会形成のできごとを読書で吸収する、つまり人文一般についての知識を身につけなければなりません。将来の司牧者にこのような教養がないとすれば、人類の歩んだ文化の諸段階をキリスト教の観点から解釈し、同世代の人々、とくに青少年にとって、真の霊的指導者としての役目を果たすことはできないと思われます。右に述べたような知識を身につけた上で、神学の各分野の研究に入ります。そうすると、神学生の視野は広がり、神の救いの計画全体を把握できるようになりますから、司祭職と要理指導に必要な手段を身につけ、全身全霊をこめて働くことができるのです。（…）

とりわけ、神学校長や哲学・神学教育の責任者には重大な義務があります。個々の科目を調整し、教えに一貫性をもたせなければなりません。教会の教えすべてを教授するよう監督すること、それも、第二バチカン公会議の指導に則り特に司牧面を重視しなければならないのです。

神学校で学ぶだけで勉学が終了するはずのないことを神学生に教えると共に、つねに知識の向上を目指すよう励ますことも、第二バチカン公会議の強調する点です。言うまでもないことではありますが、以上すべて、教導職の指示を忠実に守る心構えで進めなければなりません。同時に、教導職の教えから霊感を得て研究を続けた人々に神学生を近づける態度にあらわれるべきです。

不変の教え

聖マリア、聖寵みちみてる御方

「めでたし、聖寵満ちみてるマリア…」(ルカ1・28参照)

この祈りを唱えるたびに私たちは、お告げをもたらした大天使になったように感じます。お告げの祈りを唱えるために集う教会は、こぞってご託身の秘義を胸中によみがえらせるのです。

大天使は聖マリアに、なかんずく「聖寵にみたされておられる」ことを告げました。聖マリアが神の御子の御母に選ばれておいでになると伝えるより先に、「御身は、恩寵にみちみちておられる」とおっしゃったのです。

全教会とその中にいる私たち一人ひとりは、大天使のこの挨拶と受胎のお告げを自分のことばとしてくり返します。一生の間、とくにお告げの祈りの時に、いくたび神の御母に心を向け、「聖寵みちみてる御方」と申し上げることができるでしょう。

大天使のこの言葉をきくと、私たちはすぐにご託身の秘義を思いだします。このことばを唱えながら、ナザレトの汚れなき処女(おとめ)が神の御母になられたことを心に思い起こします。聖母こそ、神の母となるために「恩寵にみたされた御方であるからです。

きょうは聖母マリアの被昇天を思い起こしつつ、「聖寵みちみてる」という言葉をとなえています。

懐胎の最初の瞬間から、キリストの功徳に前もってあずかるというかたちで、聖母はあふれんばかりの恩寵をそそがれましたが、この事実は被昇天の裏付けとなるものです。

聖母の被昇天は、御父と御子と聖霊、三位一体の神との完全な一致をあらわしています。恩寵によって私たちは、この世にいるときから徐々に神との一致へ向かって導かれ、やがて天国で最終的にこの一致が実現されるのです。天国とは、三位一体の神との、決定的で取り消されることのない一致の状態のことです。成聖の恩寵と助力の恩寵、聖霊のすべての賜物をうけて、私たちはこの状態に行きつくよう準備しているのです。

ですからご一緒に、私たち一人ひとりの中でお働きになる神の恩寵について考えましょう。私たちは自らの中に、神からの特別な賜物をいただいています。時間を超越し、罪と死の支配に打ち勝って、神との永遠の一致まで導くたまものを受けているのです。

主が、聖母の被昇天の秘義によって、ひときわ深く、強く、すべての人の心に働きかけてくださいますように。そして、被昇天の秘義が、神の恩寵と神との一致の実りをもたらしてくださいますように。

愛するみなさん

今は亡き人々の霊魂が、永久に主との交わりを喜び味わいますように。また、いまこの世にある人々が、主との一致にふさわしく、みずからを準備してゆけますように。

「聖母は、ほんとうに、天の国におわします。」

(一九八二・八・十五)

ご聖体と告解

(聖体大会などを通じて、ご聖体への熱意が高まりを見せると)大勢の若者たちが聖なる宴(うたげ)にあずかります。みなさん方司教は、若者たちがふさわしい準備をしてご聖体を拝領するように、たえず良心に光をあて、よい準備ができているかどうかを調べるよう教えてくださっていることでしょう。尊厳と純潔と無垢(むく)、この三つは聖パウロがコリント人たちのために願った主な恵みでした。「ふさわしい心なしに主のパンを食べその盃を飲む者は、主の御体と御血を犯す。そのパンを食べその盃を飲むごとに各自自分を調べねばならぬ。」(コリント前11・27～29)

要理教育で秘跡をあつかうときには、右のような大切な点をしっかりと教えなければなりません。告解の秘跡にあずからなくても、ご聖体は大罪を赦してくれるという説は、よくご存知のように、教会の教えに反します。たしかに、教会に与えられる全恩寵の源、つまりゴミサの犠牲によって、罪人は改心の恵みを受けます。そして、改心の恵みがなければ罪は赦されません。しかし、だからといって、大罪をもっているのにご聖体を拝領してよいと言うのではありません。この場合まず第一に、司祭職を通して、神と和解しなければならないのです。

告解つまり赦しの秘跡は、洗礼以後に重大な罪を犯した人にとって、通常の、しかもどうしても必要な手段です。告解の秘跡は、痛悔する罪を許すだけでなく、神の慈しみ深い心と、神の光栄のあらわれでもあるのです。ヒポナの偉大な司教アウグスチヌスは、これを、「生活の告白、信仰告白、栄光の告白」という三つのことばに表現しました。告解の秘跡によって「教会は教会の信仰を宣言し、キリストが自由に私たちを解放してくださったことに感謝し、神の光栄をたたえる霊的ないけにえとしてみずからをささげます。」(ゆるしの秘跡」7)　ゆるしの秘跡はつねに礼拝の行為です。それによって、教会は聖なる神をたたえ、神の慈しみ深い愛を(告白し、)いやされて、死の状態から、聖性の状態へと高められるのです。

教会は司教と司祭の手をかりて告解の聖務をはたします。みなさん方はキリストのみ名において、聖霊の御力を得て罪の赦しを与えます。賢明な裁判官になってください。一人ひとりの状態をよく理解し、適切な手を打ってください。とくに、天にいます御父のみ心を示すことのできる父であってください。回心式を上手に使って、罪の意識と改心の必要を信徒の心に伝えてください。率先して、適時に、とりわけ、典礼暦年中よいときに、人びとが悔悛(痛悔)の心をとりもどすことのできるよう努力してください。

回心式はとくに子供たちに役立つと思われます。イエズス・キリストがもたらしてくださったほんとうの自由に気づかせることができるのです。またそれ以上に大切なのは、若者たちの心に改心を育み、自分たちの約束を思い起こさせ、神の子としての真の自由を得る道を理解させてやることでしょう。そのためには、定まった聴罪師について、混乱、疑い、不安など、色々な状態にいるとき、常に助けを求める必要があることを教えなければなりません。こうして聴罪司祭は霊的指導の役をひきうけ、一人ひとりに、聖性への招きに寛い心で応えるために必要なすすめを与えることができるのです。

病に伏す人びとや老齢期を迎えた人びとのなかには、教会におもむくことのできない人もいます。そのような人びとにも、かなりひんぱんに(告解の)秘跡の恩寵をうける可能性を与えてあげれば、この上ない心の支えとなり慰めとなることでしょう。病や孤独の苦しみもさほど感じなくなり、みずからの苦しみをキリストのあがないの受難にあずかる道としてみることができるようになると思うのです。

(一九八一・十二・四)

『教皇様の声』　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月　十日発行　■定価　一部六十円送料六十円　■一年予約七百二十円送料七百二十円　■二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替
神戸
3-72393